

東京医科大の不正入試を受け、文部科学省が医学部医学科を置く全国 81 大学の入試状況を調査した結果が 10 月 12 日に発表されました。過去 6 年間の入試で男女別の合格率に顕著な差がみられた大学を中心に約 30 校への訪問調査を進めた結果、大変残念なことに複数の大学で女子や浪人生を不利に扱っていた疑いがありました。文科省はさらに事実関係を詳しく調べ、大学側に不正の自主申告も促すとしています。

調査結果から、募集要項で性別や浪人回数で差をつけることを明示した大学はなく、柴山文科相は「(男女差などが出る) 合理的な理由もうかがえない」と指摘しました。しかし、性別で差をつけると明示すれば許されるというものではありません。性別を理由に合格の基準を変えるというのであれば、その必然性を説明できる明確な理由が必要です。これはジェンダー・バイアス (性別による無意識の先入観) に関わる問題です。

そもそもジェンダーとは、生物学的・解剖学的性差である sex に対して、社会的・文化的に作られた性差のことを指していて、区別されるようになってからたった半世紀くらいしか経っていません。教育の現場でも固定適性的役割分担意識は完全には払拭されておらず、これが社会全体のバイアス (先入観) につながっていると考えられます。

バイアスは文化、社会、そして経験によって育まれます。バイアスについての専門家によれば、「自分の周囲で関連付けられているものどうしは、脳の中でも関連付けられてしまう」のだそうで、これを克服するためには段階を踏んだ努力が必要です。人はどんなに公正に人を見ようと思っても、事前に知りえた情報や、自分が見た世界だけでその人を判断してしまうことが多く、一旦判断を下すと修正は困難で、自分の判断を正当化するために有利な解釈をしてしまいます。

国連では 2015 年に、2030 年までに達成すべき「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs)」を採択しましたが、17 の目標のうち 5 番目は「ジェンダーの平等を達成し、女性と女児のエンパワーメントを図る」です。女性と女児に対するあらゆる形態の差別に終止符を打つことは基本的人権と捉えられています。そして、人類の潜在力の開花と持続可能な開発の達成は、人類の半数を占める女性の権利と機会が否定されている間は達成することができないとされています。

まさに今、日本はジェンダー・フリーな社会の形成に本気で取り組むことが求められています。「女子や浪人生を不利に扱っていた」大学は、今回の医学部入試に関わるジェンダー・バイアスを素直に認め、変化を恐れることなくバイアスの排除に取り組んでもらいたいと思います。